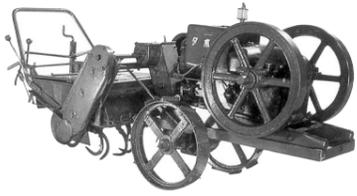


垣内 昔から農村の仕事は、つらいものでした。わが国で石油エンジンが農業用に使われたのは大正4年でほとんどが米国からの輸入に頼っていました。権四郎さんは大正11年に、農工用石油エンジンの生産を始めました。その頃、西日本で大干ばつが続き、田畑の揚水ポンプ用の需要が急増しました。

昭和12年にはエンジン専門の堺工場(大阪府堺市)を新設。その後から権四郎さんは、エンジンを搭載した耕うん機の研究を指示しましたが、戦争の激化により中断。戦後再び、耕うん機をやるうと決意し、堺工場の一角に研究所を設けました。昭和30年代になつてから農村の労働力不足とあいまって耕うん機が売れ出し、その後トラクタ、バインダー、田植え機、コンバイン、と体系化し、総合的な農機メーカーとして成長を遂げました。



耕うん機第一号(昭和22年)

「厳しい農作業を軽減し、機械化できないか」「大衆が、欲するものをやってみよう」。これが原点です。

はじめ3輪車を製造しましたが、4輪車に切り替えて製造を続けました。しかし、すでに大量生産に入っていた米国製の輸入車との競争で、太刀打ちできず。大正15年、陸軍の勧めで不振に悩む東京のダット自動車商會と合併しダット自動車製造株式会社となり、社長に権四郎さんが就任して再建に努力しました。

同社は貨物自動車を生産しましたが、昭和6年に大阪・東京間ノンストップ完走の小型乗用車(500cc)を発売し「ダットの息子」という意味で「ダットサン」と命名しました。その折、サン(SON)のローマ字読みではソン(損)となるので、SUN(太陽)に変更してダットサンとしたのです。この会社も外国車との競争に勝つことができず、自動車製造に意欲的であった戸畑鋳物に委譲しました。



本社玄関前(昭和29年)

「垣内さんは、権四郎さんに対する思いはありますか。」 私は昭和29年に入社しましたが、その頃秘書を連れたステッキをもったご老人が、会社の玄関先で拝礼して入っていくのを何回か見たことがあります。先輩から「権四郎翁ですよ。」と教えられました。

権四郎翁は昭和24年に社長職を引かれ相談役となっておられました。クボタに対する限りない愛情と、自分の夢を実現してくれたという感謝と敬意を表しておられたのではないのでしょうか。

「事業家であり、優しい心を持った素晴らしい人ですね。」

垣内 クボタ6代目社長の三野重和さんから生前こんな話を聞いたことがありますが、三野さんは昭和23年の入社ですが、3、4年経った頃、経理部に所属し経営資料などをつくっていたある日、某工場が生産量の割に利益が上がっていないので原因を調べようと、電話で工場の製造課長に質問。ベテランの課長は、「本会社が買った材料に質の悪いのがあった。だからこれくらいの不良率は当然。」と説明し、疑問をはさんでも、すぐ明快な答えが返ってくる。

当時の社屋は木造で、大きな声は廊下まで聞こえたんです。たまたま会社に来られた権四郎翁は通りすがりに、この電話のやりとりを耳にされ、秘書を通して、三野さんの上司に「あの若いのは現場を知らないから、いいようにあしらわれている。もっと現場を勉強させなさい。」とお叱りがありました。三野さんは大きなショックを受けたそうです。

それから数日後、思いがけず、翁から三野さんに柿が届けられました。翁は自分の邸内で柿を栽培しておられ、熟した柿を見て思い出されたのか「あの若いのに食べさせてやれ」とわざわざ会社まで届けてくださったのです。正直言ってお叱りを受けたときより驚きました。桃栗3年、柿8年

「若いのがんばれ」と温かい激励の意味が込められていると思ひ、感激に胸が一杯なつたということでした。

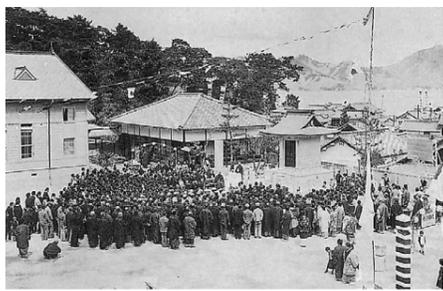
クボタは事業を多角化されていますが、久保田権四郎さんは、時代の変化を読み、次々と精力的に進められたのです。

垣内 昭和15年に創業50周年を迎えましたが、当時の工場数は9、従業員8500人、総資産額5329万円が国産工業界の91位にランクされています。

昭和20年終戦前の事業内容は、鑄鉄管、各種鋳物、鑄鋼、鑄型、内燃機関、工作機械、衡機、節炭機、給炭機、特殊車両、バルブ、一般機械など多岐にわたりました。工場も12を数えるにいたり、工場のため、国民のため、「国のため、国民のためになることをやる」という信念があったと思います。

昭和34年11月、89歳余の天寿を全うされましたが、その生涯は、気迫に充ちた奮闘努力の一生でした。

久保田権四郎さんは、因島が産んだ郷土の誇りです。垣内さんの話を聞いて、因島の若い人たちのなかから、後に続くものが出てくることを期待しています。今日は、ありがとうございました。



大浜小学校講堂・敬老会館

170名の卒業証書授与式

3月1日、卒業式が行われ吹奏楽部の「世界に一つだけの花」の演奏で、卒業生が入場。

松林博文校長は、式辞で「復古維新」という言葉を挙げ「今こそ、古き良き日本人の立ち居振る舞いを」と挨拶されました。

最後に、卒業生・原山由衣さんのピアノ演奏で、3年生の感情のこもった「仰げば尊し」が流れ、それに



在校生が唱和する形で、大団円を迎えました。

第2回 オーストラリア海外研修 12名参加実施

因島高校では12名が、引率の山崎愛子先生とともに、3月21日から31日の日程で、オーストラリア海外語学研修をしました。ホームステイしながら、ブライビー高校に通って、同世代の若者と交流するなど、国際感覚を磨きました。

因島高校や生徒を支援するために、因島市から研修費



社行式で村上因島市長が激励

岡野裕次郎君、村上俊太君卒業コンサート

昨年、「市制50周年記念NHKのど自慢」で、岡野裕次郎君と村上俊太君が、堂々優勝し、因島高校の名を日本中にとどろかせました。2月29日、芸予文化情報センターにて、卒業コンサートを行い、ピアノや、ギターを弾いたり、歌ったり、また音楽一家の両家族も加わり、にぎやかでした。最後に、のど自慢優勝曲の「さくら」をアンコール曲で披露しました。



両君とも、東京の音楽専門学校に進学します。「東京で勉強して、また、因島でコンサートがしたい。」と抱負を語っていました。

吹奏楽部 定期演奏会

皆様ののおかげによって、毎年恒例の定期演奏会が3月21日、開催されました。ことをお礼申し上げます。

昨年4月には、吹奏楽部の指導教員がいないうち、練習・部活動をする中、練習・部員・保護者も大変不安なスタートでした。7月からは、非常勤講師(音楽)の先生に来てもらい、指導してもらえらることになり、部員も保護者もまずはほっとしましたが、顧問・指導者と部員・保護者のコミュニケーション不足により、精神的にダメージを受け、クラブに参加できなくなる部員も出始め、しんどい思いで定期演奏会を迎えた子供たちです。

吹奏楽部保護者会

市民の投書箱 勉強より優しい心を

朝早く、大浜のパーキングから尾道行きのバスに乗って驚きました。30人近くが高校生です。こんなにも、尾道方面に通学してるのか、とびっくり。しかも、ほぼ全員が英語の本や歴史の教科書を出して、勉強してるのです。向島から、高齢のおばあさんが乗ってきて座席の端もって立ってるけれど、よく聞いていました。高校生は、見てもみぬふり。誰一人として席を譲りません。いくら勉強ができて、やさしい心配りのできない子はダメじゃと思うんです。勉強、勉強いうて、本土の進学校にいかせるのもいいが、心がかわいていては、つまらない。

後記編集

久保田権四郎さんのことを是非記事にしたいと思ひ、私の元上司垣内さんに「久保田権四郎さんについては一番詳しい人だから」と頼みこみ、お忙しいにもかかわらず、快く引き受けてもらいました。ありがとうございました。クボタでは、資料や写真を提供していただき、お礼申し上げます。(村井 記)

オーストラリア海外研修からみんな元気に帰ってきた。因島高校に入学すればこのようすばらしい体験ができるんだ。と後輩の中学生に伝えていただきました。(ま)

因島高校を支援する会

発行 因島高校を支援する会
会長 竹中啓修
事務局: 因島高校PTA
☎08452-4-1281
題字 竹中啓修

特集 因島市名誉市民・(株)クボタ創業者 久保田権四郎さんの功績と人柄



久保田権四郎
クボタ創業者

——本日はよろしくお願
いします。

久保田権四郎さんは郷里
因島にも道路や橋、敬老館、
小学校講堂の建設など、惜
しみなく援助され、顕徳碑、
記念碑が多数建立されてい
ます。例えば故郷の大浜村
から隣の中庄村に行くのに
は、海岸に山が立ち上り、た
り、険しい山道を通らなく
てはいけなかった。私財を
投じて海岸周りの道をつく
っていただき島の者は感謝
しています。

垣内 久保田権四郎さんの
ことを、一言でいうと、
「報恩感謝の念」を常に持
ち続けていた人といえるで
しょう。親、故郷、地域、
国に対してですね。



大浜村、海岸道路建設(大正11年)

昨年因島市50周年を記念
して、久保田権四郎さんが
因島市名誉市民に選ばれた
こと。久保田権四郎さんの
人柄、産業発展に対する貢
献、故郷因島への思いには
並々ならぬものがあり、私
は学校卒業後、クボタに数
年勤務したこともあって、
誇りと尊敬の念を一層深く
しています。

垣内義春氏は、かつてク
ボタ100年史の編さんのため
因島を何度か訪問されまし
たが、垣内さんは、私がク
ボタ在職時の上司(当時同
社人事部長)であり、クボ
タにも今回の取材について
お話ししたところ、3月
11日、本社応接室で、久保
田権四郎さんについてお話
を伺うことができました。

——子どものころは、どん
な子だったのでしょうか。
垣内 大出権四郎さん(後
に久保田姓になる)は明治

3年(1870)10月、農
家の三男に生まれました。
利発で辛抱強く、また思い
やりのある少年だったそう
です。家が貧乏だったため
何度も悔しい悲しい思いを
したと述べておられます。

10歳の秋祭りのとき、友
達が、小遣いを見せ合いな
がら誘いに来たが、祭りに
行きたいとせがむ権四郎少
年に、お母さんは、黙って
抱きしめるだけ。「貧乏で
小遣いがないんだ。」と悟
るんですね。それからとい
うものは、「必ず偉くなつ
て、お母さんを喜ばせてや
る」ことが生きる目標にな
るのです。そして小高い丘
に登り、沖を走る蒸気船を
見て、「あの船を動かす機
械をつくる西洋鍛冶屋(機
械業)になろう。」と心に
誓ったということです。

——ひとりで大阪に行って
苦労されたそうですね。
垣内 成功するためには大
阪へ出なければならぬとい
い、満14歳のとき、大阪
に行く船に乗せてもらい炊
事や水汲みの仕事をしながら
大阪をめざしました。大
阪は折からの不景気でなか
なかな働き口がなく、やっと
見つけたのが「はかり」用
の鋳物をつくっていた「黒
尾鋳造」で子守と掃除、使
い走りとして住み込みを許
してくれました。権四郎さ
んは、鋳物の仕事でなかっ
たので落胆しましたが、こ
れも修行の一つと思いなお
して、子守や掃除に真剣に
取り組むことにしました。

陰日向の無い働き振りが認
められ、まねに仕事場の掃
除も言いつかるようになる
と、道具や製品に直接触れ
ることができたので大層喜
び、先輩の仕事ぶりや呼吸
などを読み取って仕事を覚
えようと努力しました。
やがて仕事の初歩を教わ
るようになると、日頃の研

究熱心に加え、天性の器用
さを発揮して、たちまち上
達し、3年の年奉公明け
ころには、ひとかどの職人
として扱われるようになり
ました。

——19歳の若さで独立しま
した。
垣内 お礼奉公中、父の死
にあつた権四郎さんは、成
功して母を早く安心させる
ためには、一日も早く独立
を奮起しました。鋳物技
術の幅をひろげるために、
日用一般鋳物製造の「塩見
鋳物」に移るとともに、独
立のための資金作りに励み
ました。100円の資本金
を貯め、今の大阪市中央区
日本橋で、長屋の一隅を借
り、「大出鋳物」の看板を
あげました。明治23年(1
890)弱冠19歳のことで
す。当時の100円といえ
ば、東京の銀座の土地2坪
に相当します。

独立のための資金作りに
ついては、ご自分でも強烈
な思い出だったのではし
ょう。後に功なり名を遂げた
立志伝中の人物として週刊
誌や対談に登場する都度
「一銭の金も惜しんで風呂
や散髪へも行かず命がけで
金を貯めた。」と語ってお
られます。

ね。——小柄だったそうですね。
垣内 身長154センチ、
体重45キロのやせた体でし
たが、志は大きく精一杯働
きました。鋳込み日は徹夜。



会談風景
(右から石黒賢クボタ常務、垣内さん、村井さん)

鑄込みのない日も大忙し。
朝の炊事、仕事の指図をす
ませ、製品を積んだ大八車
を引いて、金物屋街へ売り
に行き、帰りに次の原料を
仕入れ、米野菜を買うとい
う生活ぶり、金繰りに
悩まされたそうですね。

——因島から妻を迎えまし
た。
垣内 独立の翌年郷里より
18歳のサンを妻に迎えまし
た。サンが悲しかったのは、
質屋通い。子どもの着物ま
で手にする権四郎さんに、
「それだけは勘弁して。」と
泣いたそうですね。しかし、
創業期の苦労をともにした
サンは31歳の若さで亡くな
りました。

3回目の移転は明治28年
5月で、今度は月賦で土地
を購入し、本腰を入れよう
とした矢先、7月に母死去。
「偉くなって母を喜ばすこ
と」を生きがいにしていた
権四郎さんは、一時果敢と
なりましたが、以後は2年
前から始めた鉄管鋳造の研
究に一段と打ち込むことに
なるのです。この頃の人員
は兄や因島出身の弟子を含
め10人をこえていました。

——父母の死がバネになつ
たのですね。権四郎さんが
鉄管をつくらうと思つたき
っかけは何ですか。
垣内 明治の初期、猛威を
振るつたコレラなどの水系
伝染病対策や防火対策とし
て水道の敷設が急がれてい
ました。明治20年に横浜水
道が完成したのに続いて各
都市でも順次起工されてい
きました。輸入品が主でし
た。

の鑄造を依頼したが実績
が上がらず、半分を輸入品
に切り替えることになりま
した。このような動きの中
で権四郎さんは、「外国人
ができることが、日本人に
できないはずはない。」「国
産化に成功すれば、輸入防
止、資金の海外流出の節減
になる。」と意欲を燃やし、
研究に没頭したのです。

直管は薄くて長いものだ
から厚さが片寄ったり気泡
ができるのでむずかしく、
他の鋳物業者も試みたがほ
とんどがやめていきまし
た。権四郎さんも失敗の連
続でしたが、ななめ吹きや、
たて吹きなど、工法を試作
研究しました。研究を始め
て7年後、ついに「たて込
め丸吹き鑄造法」に成功、
まとまった注文を受けるよ
うになりました。さらに量
産のための「たて吹き回転
式鑄造装置」という流れ作
業方式を開発しました。

——権四郎さんが、なぜ、
これほど、水道管に熱中し
たかというところ、因島に育ち
たに苦勞したことがあるか
もしれませんね。島では井
戸水に頼っていました。今
では、本土から海底水道管
で送水されるようになり安
心です。

——久保田さんに見込まれ
て養子になりましたね。
垣内 得意先の久保田マツ
チ器械製造所の久保田藤四



大阪市水道局に鉄管納入

郎さんから、人柄を見込ま
れ、養子に懇望されました。
鉄管の仕事が続ける条件で
明治30年養子になり、久保
田姓を名乗り、社名を「久
保田鉄工所」に改めました。

——鉄管のクボタとして、
次第に有名になりました
ね。
垣内 品質は外国製にも勝
るほどで、明治37年には大
阪ガスにも採用されます。
明治41年には最新鋭の本
店工場(現・大阪市浪速区、
今の本社のある地域)を開
設、人員も300人となり、
翌年には500人をこえる
状況となりました。鉄管生
産は急増し、大正元年(1
912)には、年産4万ト
ン(全国比59.7%)に達
しました。クボタの鋳鉄管
の名声は高まり、東南アジ
ア、オランダなど海外市場
へも進出。

昭和5年(1930)に
インドネシアから注文があ
つたときのことです。利益
がないため、幹部や社員は
反対しましたが、権四郎さ
んは、「利益はなくとも、
外貨を稼げるから、国のた
めになる。」と言いつつた
そうですね。製品が優秀であ
つたことから、その後、中
南米にまで鉄管を納めまし
た。

——機械分野にも進出しま
したね。
垣内 大正3年、権四郎さ

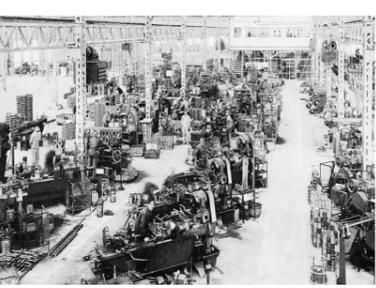


鉄管の量産化成功
(中央背広が権四郎さん)(明治29年)

んは、経営安定のために機
械工業の分野に進出するこ
とにしました。鋳物は機械
の部材であり、機械の動向
に左右されやすいこと、い
い機械はいい鋳物からでき
るのであり、鋳物づくりは
は多年の経験があること、
そして機械工業は必ず隆盛
に向かうと予見したこと、
そして少年期の夢を実現す
る新たな挑戦でもあったの
です。本店工場に最新鋭の
設備を整え、海軍工廠や造
船所から設計技師や熟練労
働者を迎え入れ旋盤の製造
からスタート。各種工作機
械に続きスチームエンジン
をはじめとする船舶機械へ
と拡大していくにつれ本店
工場は狭くなり、6年には、
鉄管専門の尼崎工場(兵庫
県尼崎市)、鋳物専門の恩
加島工場(大阪市大正区)
を新設しました。

——地域の児童教育にも力
を入られましたね。
垣内 明治末、40歳の頃で
す。不況で本店工場付近は、
不就学児童が多かった。権
四郎さんは熱心な協力者を
得て、徳風尋常小学校を創
立し、必要経費を毎月負担
するなど、児童福祉と教育
に尽力しました。

——たぶん、自分が小さい
ころのつらさを感じ、その
ような境遇の子達を救おう
としたのでしょうか。
農業エンジンの研究も過
酷な農業の仕事に業にしま
すね。



堺機械工場(昭和12年)